

日本戦闘者



荒谷 卓（あらや たかし）
 生年月日：昭和34年秋田県出身
 略歴：昭和53年東京理科大学、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職(1等陸佐)。海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
 平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
 平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
 著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊—最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動かない力』三笠書房
 熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
<https://musubinosato.jp/>



開所式演武。

「熊野飛鳥むすびの里」は、平成30年(2018年)11月1日に開設した。1日は、仲間の宮大工の棟梁がつくってくれた神棚に天照大神、節霊(ふつのみたま)大神、祓戸大神(はらえどのおおかみ)を御祀りして節霊堂武道場の清祓(きよはらい)式を斎行した。3日はこの地の産土の神をお祀りする飛鳥神社の例大祭に参列し「熊野飛鳥むすびの里」開所を御報告した。そして4日は「熊野飛鳥むすびの里」開設記念行事」を開催した。熊野市内外から100名を超える方達にご参集頂戴し、正式にむすびの里の活動を開始することとなった。

開設時、むすびの里は約3,000坪(10,000㎡)の敷地に既存の建物が5棟(武道場、食堂、宿泊棟、研修棟、母屋)であった。土地と施設は、20年以上使用していなかったため、裏の山林が家屋に押し迫り杉や檜が家を包み込んでいた。山と建物との間の側溝は完全に土で埋まり湿気がひどく、鹿、猪、猿の楽園と化していた。

まずは環境整備、独りで家を修理し草を刈り枝葉を切払っていると、集落の長老たちが手伝いに来てくれた。70歳を過ぎた長老たちは生きるための知恵と経験



の宝庫、さらに体力も抜群。裏山の直径50～70cmクラスの杉や檜をバンバン切り倒していく。60本ほどの木を切り倒したころには、見違えるように明るくなり、人の住むエリアと山の神々の境目が明確になった。地面も掘り起こすと、次から次に側溝があらわれてきた。一番苦労したのは裏山と宿泊棟の境目の側溝だ。竹の根がぎっしりと側溝の中を占有しコンクリートと一体化していた。1m進むのに半日を要した。ついでに埋没していた池の泥を組みだした。そこに川から水路や田んぼに迷い込んできた魚を放してやった。毎日の肉体労働で身体がガクガクになりながら、自然の力に畏怖の念を抱き、この土地の生命の一つになる喜びを感じた。

環境整備があらかたできると、生きるための食いの生産基盤づくりに取り掛かった。最初は、猪がミミズを食べるために地面を耕耘したかのように掘り起こされていた場所で畑を作ることにした。鋤で試してみたが石だらけで全く歯が立たない。ユンボを借りて畑つくりを始めた。熊野は巨石が多い。地面を掘り起こすと俺の身体より大きい石がザクザク出てくる。ユンボ様の大活躍で、ようやく200㎡の畑を作ってみたが、巨石を取り除くとあちらこちらが大きな窪みとなった。これでは畝を立ち上げられない。集落の長老の意見を聞いて牛糞を2tトラックで4杯分放り込んだ。立派な畑が出来た。しかし、元々猪や鹿のたまり場だった場所、柵を作らねばならない。山から切り出した木を鉋で削り柵の支柱を作り、破棄した害獣ネットをもらって修理し畑を覆った。さらに、武道教室門人のご家族から頂いたアイヌ犬と琉球犬の子「ヒサ」を番犬として張り付けた。努力の甲斐あって、堆肥満杯の畑からは美味しい野菜が大量に収穫できた。翌年、畑をさらに800㎡に広げた。現在は1反分(1,000㎡)に広がり、客人や隣人に

くれるので、広大な敷地の管理や活動は順調に進展してきた。「熊野飛鳥むすびの里」の活動は、大きく3つの柱からなる。「農」「武」「学」である。この3つは、国家存立の要素でもある。「農」は自立自治の道。「武」は自主防衛の道。そして「学」は生成発展の道である。

食べてもらえる十分な量の野菜がとれるようになった。木を切り倒した山すそは茶畑にした。切り倒した栗の木は椎茸の菌を打ち込んで原木とした。

初年度は、田んぼ1反分をかりて、初百姓仕事にも取り組んだ。長老から機会を借りての見様見真似の稲作だ。翌年からは1丁歩(10,000㎡)に広がり、いっばしの百姓になった。長老たちは猟をやるので、猪と鹿の肉はたらふく頂ける。これで食料は十分、生きていける。

施設の修理は、まずは道場の床を張り替え量を敷いて稽古できるように整えた。敷地の祠(ほこら)には山の神をお祀りし、裏山のキハダが生えている巨石は山の神の磐座として御祀りした。母屋には祖霊社を設け先祖代々の御霊をお祀りした。客人が泊まる宿泊棟の畳と襖は張替えた。裏山で切り倒した木を削って磨いて食堂の60人分のテーブルを作った。テーブルの脚は、むすびの里の横を流れる大又川の増水で流れてきた杉の倒木を使った。研修棟は、俺の書籍を置く図書室とするため珪藻土を塗って湿気対策をした。知人から檜風呂と杉風呂を頂いたので露天風呂を作った。後に檜サウナも増設した。作業場が必要となり小屋を作った。後に米の乾燥・精米・貯蔵のための米蔵を増設した。去年から今年にかけては、道場増設のため、隣接する森林約4,000㎡を集落の長老から買い取り、杉と檜200本を切り出した。この木を乾燥させ製材にして道場を増設し、130畳の武道場となった。

同居する生き物は犬と鶏。犬はヒサ(雄)から1年遅れでうちに来た真っ白な紀州犬のシロ(雌)。半年おきに子供を3回15匹産んだ。その子犬うちのうち、雄のヒト1匹だけ番犬として残し、他はすべて里子に出した。最初に飼った鶏5羽は、放し飼いをしていたら鎖をぶっちぎって襲いかかったシロに全羽瞬殺されちゃった。その後また4羽飼ったが、また1羽、今度はヒサに殺られた。その後は、畑に隣接した鶏舎を作り、畑の柵の中だけに放し飼いにするようにした。おかげで今は、5羽の鶏(アローカナ)がよく卵を産んでくれている。

開設当初から、施設整備を手伝ってくれたのは特戦群時代の部下だった。開設翌年からは仲間の大石君が移住してきてくれて、毎日一緒に仕事をしてくれて、しばらくたって、仲間の井口さんと家内が引っ越してきた。志と共にする仲間が延べ5百人になるが、彼らが時間を見つけては、わざわざ熊野まで手伝いに来て

くれるので、広大な敷地の管理や活動は順調に進展してきた。「熊野飛鳥むすびの里」の活動は、大きく3つの柱からなる。「農」「武」「学」である。この3つは、国家存立の要素でもある。「農」は自立自治の道。「武」は自主防衛の道。そして「学」は生成発展の道である。

日本は、遺跡(青森県大平山元(おおだいらやまもと)遺跡から出土した約1万6,500年前の土器)として確認できる世界最古の定住共同体文化発祥の地であるが、この時代(教科書的に言えば縄文時代、日本神話では国造りの時代)の定住型共同体を支えたのは「農」生活である。そして、約2,700年前の神武天皇東征以降は稲作を中心とする「農」が普及した。定住型「農」生活は、安定的成長社会を持続するのに適した家長制縦家族と農村共同体を形成した。この家長制縦家族と農村共同体が日本文化の基調となり、これを相似的に拡大した「天皇を家長とする国家観」が生まれ、「八紘為宇(天の下に一つの家のような国を創り為す)」を理想とした社会規範と国家目標が定着した。即ち「農」生活を営む家長制縦家族と農村共同体が日本の原点である。この「農」の在り方は、生きるための「農」であり、脱ビジネス農業、種子や肥料等を他に依存しない完全自立農である。つまり「農」生活自体が自立自治を意味する。

同時に、このような「農」は常に自然と共にあることから自然畏怖と、田や水路などを開拓し整えてくれた祖先への感謝の心を養う。いわゆる自然と祖先を崇め感謝する日本文化「神ながらの道(神と共にある生き方)」の実践の場となる。また、「農」は共同生活の日々の中で共助・共生・共栄の社会規範を修養し、自己啓発の「学び」の場でもある。現代は、学校教育と称して子供を家庭や共同体から強制的に引き離し、アングロサクソンの伝統的価値観である「絶対核家族=絶対個人主義=絶対自由主義」は正しいという啓蒙教育を強要している。これは、日本の伝統的価値観を破壊するため工作である。日本人が日本人として正しく生きるためには、教育母体としての家族と共同体を取り戻さなくてはならない。すなわち、日常の家庭生活や地域社会での生活が教育に成る様にならなくてはならない。

しかし、そのような家庭と地域環境は破壊されてしまったので、失われた日本人としての記憶を取り戻すための歴史・

伝統・文化の学習も含めた「学」が重要となる。むすびの里では、そのための教育を定例の勉強会や講習会として実施している。

さて、このような日本の共助・共生・共栄文化は、行き過ぎたグローバル資本主義(自由競争)によって荒廃した日本と世界を救う有効な手段であるが、新世界秩序とは考え方が相反するわけだから、パワーエリートに管理されたメディアによる誹謗中傷や公権力による排除が予想される。これに対して、正義を貫き通し精神力と行動力を養う必要がある。それが「武」である。「武」とは物質的戦闘力のことではない。それは、俺がこの「日本の戦闘者」で毎回言っている日本人としての大和魂のことだ。貴い日本の文化を守るため、何度でも生まれ変わり、守って守って守り貫く荒魂のことだ。俺がいれば日本は大丈夫だと信じる大丈夫(マサラオ)の気概のことだ。「農」「学」「武」を柱として活動することで、自ら日本を体現し、日本人を生成し、日本を健全たらしめる。熊野飛鳥むすびの里は小日本だ。

